

平成26年7月5日発行(毎月5日1回発行)
第54巻7月号(通巻660号)

風土



7

梅は実に

神蔵

器

たまきはる「奥の細道」朴の咲く

積乱雲 たつ文台と大ひさご

採茶庵 声なき亀の鳴きにけり

芭蕉庵跡

つんつんとメダカのおよぎ梅は実に

指折つて初心たふとし雀の子

花咲いててんだいうやく雌雄異株

数ならぬ身をなこひしき虹二重

待つたなし時の流れと竹の子と

すだれ編む音の涼しき江東区

梅雨に入る小名木川より隅田川



竹間集

同人作品



捨 田

工藤ミネ子

日詰てふ村深ぶかと雪残る
午後四時の日を山の端に雪解急
福寿草しぼませ山に日の没りぬ
ひと声に弛む霊場匂鳥
囀りに返すさへずり観世音
ほどけたる春の蚊柱吾れに立つ
春うらら捨田は角を持たざりし

田螺鳴く

柴田 久子

日本橋生まれのははや桜餅
風呂敷の自在なりしよ桜餅
桜餅前もうしろも分譲地
近道の陽炎壊しこはしゆく
花祭友の墓より廻りけり
春愁や笑みを秘めたる観世音
三姉妹あそびし田圃山螺鳴く

花吹雪

中村 洋子

長谷寺や姉の後ろの花吹雪
風光る閑谷学校避雷針
福島はいま陽炎の揺れにあり
四月来る封書に二円切手足す
穀雨かな微動だにせぬ真田石
駅一つ手前に降りぬ花の宵
実朝の墓前にをりて花吹雪

初 燕 橋添やよひ

春の夜の闇浅しとも深しとも
春田打つ音のひびきも奥吉野
初燕相寄る川の一つとなり
雨雲となる風の出て啄木忌
陽炎に足より夫の攫はるる
念持仏もたず生き来て山桜
碧梧桐虚子のことなど桜餅

山の鳥海の鳥 南 うみを

荒鋤きの田の土かをる春祭
投げ餅を受くや蓬生踏み荒し
太根あらはに断崖の山桜
熊ん蜂うなりて花をわしづかみ
かたつむり殻透きとほるまで伸びて
代搔きの田に山の鳥海の鳥
映りたる家くしやくしやに田を植うる

残 桜 宮川みね子

てのひらに葉並べて花の冷え
犬とゆくいつもの道の日永かな
藤の花水面の鴨の暮れにけり
初燕木にかけてある道しるべ
鳥帰る礎石踏みぬてほとけみち
残桜や二階へ上る齒科医院
大皿の水切りたてて緑さす

花万朶 浜 福恵

土筆摘む水平線をま向ひに
川底の石がきらめく入彼岸
命日や蓄かかげて華鬘草
ひと思ふ根分けの土にまみれつつ
花万朶 三年日記百日目
夜桜や海の奥なる兵舎の灯
君が旅路磯崎ふみ子さんを懐むの鉦のひびきや花の里

葉 桜

山田 暢子

臥して過ぐ夫の一日さくら咲く
戸を開けてすぐ閉める音花月夜
音立てて野菜切りをり春夕べ
花冷えや行方不明の鍵ふたつ
春日傘たたみて墓に預けたる
葉桜やコーヒータイムの午後三時
薄暑かな敷居へだてて夫の部屋

御開帳

門伝 史会

秩父霊場七つ巡りて春惜しむ
御開帳 回向柱の綱握り
立像の豊かな手足開帳寺
七曲り巡礼道の陽炎へり
月に効くてふ薬師の飴や八重桜
遠く散り身ほとりに散り花吹雪
卵かけご飯の甘き啄木忌

「老樹」以後(四)

野沢しの武

花菜漬妻の回忌の食膳に
手厳しき古き句友や春炬燵
娘の計らひの花籠とどき個室の春
鉛筆を持てば痛む手木の芽寒_ム
あたたかし日曜に来るヤマト便
鳥引くや遺骨収集未完の島
汚れ物洗ふ妻亡し夏隣

春シヨール

鈴木 石花

一人足す一人で一人四月馬鹿
機音のとほのく機の町臈
絹織のグラデーションや春シヨール
我家まで磴三百五十陽炎立つ
かつて予科練習生と花の宴
群大の池の辺枝垂れ桜祭
三日三晩の山火事治む春時雨

囀り

工藤ミネ子

出掛けにも残雪の端踏み崩す
福寿草村に残りし人ら老ゆ
百年の畦木残雪腰切り
大鵠帰心の胸の田に汚れ
雪吊の髻痩せてほどかる
片言を覚えしやうな芽のふたつ
木も山も雲も入れたる雪代田
帰りたる白鳥の羽根田にあまた
失せ物を探すに使ふ春の昼
囀りに入りて身動きとれぬなり

山河集

同人作品



神蔵
器選

三月やひいふうみいと指を折り
燕来て「頭上注意」と駅にあり

柿沼 盟子

葱坊主平らに戻る畑かな
かぎろひて上野に人の溢れをり

みづうみに光たらざる鳩の恋
青麦やここより列車手で開けて

浅田 光代

叡山を仰ぎて畦を厚塗りす
さへづりや天守へ裏坂表坂
一本のさくらの下の登城口

逃げ水や未完に終はるははの私史

上村 葉子

初 鯉 眼 の 青 は 海 の 碧
不揃ひの海苔の切り口朝餉かな

和三盆の少しを足して木の芽和
門の扉を軌ませ閉づる春嵐

大櫓空和らげて芽吹きけり

生田 作

湖心より波の生まるる桜東風
日輪に蝶の眠りの深さかな
時をりの街騒桜散り急ぐ
春宵の耳が陰持つ萩の壺

あめんぼの脚の掛かりて花筏

生田惠美子

山女宿撫網もて落花すくひをり
コルク栓抜く音飛んで三鬼の忌
車座のそびらに掛けて花木五倍子
箱書の文字のくづしや亀鳴けり

◇特別作品◇(抄)

花の散る

榎本ふじえ

僧院の御祈禱ひびく無我の春
最合仏路傍に座して別れ霜
花浴びて走る少女の束ね髪
山門の寄進菩薩や花の散る
初蝶の逆らひきれぬ湖の風
この風に今宵限りの花惜しむ
神将に見透かされたる春の雷
雨上り踏むには惜しき花じゆうたん
葉桜となりて制服板につき
春寒の御手水鉢に武田菱

風土集



神蔵 器選

学校に桜ありけり集へとぞ 東京 柿沼 盟子

襲多き黒のドレスやライラック
春眠や一筆箋の野太く

茎立ちて十字花植物匂ひ立つ
ビル群に日の昇り来て棚霞

春月や古希を跨ぐも一弾指
腰骨を伸ばせば初夏の東山

花びらを飲み込む太き錦鯉
うつくしきひらかなもんじさくらかな

山笑ふ故郷の山に抱かれたし
春雷や赤子が大地踏みはづす

うららかや待合室に盲導犬

平等院夜慶

鳳凰堂雲中菩薩のおぼろかな
田螺鳴く丈八寸の童子仏

東京

柿沼 盟子

京都

杉本葉土子

福生

雨宮 桂子

うぐひすや極楽浄土より来しか
リラ冷えやフランス人形口を開く
菜の花や木造校舎に三教室

横浜

佐野つたえ

屋島よりみる戰場

春霞那須与一の立ちどころ

屋島寺に「屋島絵巻」や春の雨

恙なき今日を過ごせり新茶汲む

ふた駅は花の城址と花の城

大和

落介絹代

リラ冷や額に日差しのモネのリラ

到着の国は果てなき麦の秋

新樹晴嶺々は魁夷の青をもて

カフエテラス真白き皿に緑さす

落慶の平等院や鳥帰る

福生

小峯 綾子

不意打ちの「南都声明」春の雷

尼寺や八一の歌に蝶あそぶ